OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	カンボジアのスポーツ発展への取り組み : ポルポト時代を生きたサッカー選手のライフヒストリーから
Author(s)	岡田, 千あき
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2011, 37, p. 231-250
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6242
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

カンボジアのスポーツ発展への取り組み
－ポルポト時代を生きたサッカー選手のライフヒストリーから－

岡田　千あき

目　次

1. はじめに
2. スポーツと共に生きて
3. カンボジアのスポーツ振興
4. 発展への道筋

カンボジアのスポーツ発展への取り組み
－ポルポト時代を生きたサッカー選手のライフヒストリーから－

岡田　千あき

1．はじめに

カンボジア王国(以下、カンボジア)は、ベトナム、ラオス、タイと国境を接する東南アジアの仏教国である。首都をプノンペンにおき、面積は約 18 万㎢、人口は約 13.4 百万人で、うち 9 割がクメール系民族である[1)]。カンボジアは、1970 年代のポルポト政権時代とその後の内紛の影響から未だ貧困が深刻であり、乳幼児死亡率の高さや成人識字率の低さに見られるように多くの開発課題を抱えている。1991 年のパリ和平協定を経て新しい国造りの過程にあるが、国の復興･開発に向けて様々な分野における人材育成が急務であり、開発援助機関による多くの支援が継続されている。

本研究の対象であるオク･サレット(図 1)が生まれ育ち、現在も居住しているシェムリアップ州は、国内の 24 州･特別市の中で最も貧困が深刻な地域の一つである。しかし、一方で、世界遺産アンコールワット遺跡群を有することから、州中心部では外国資本の流入に牽引された目覚ましい経済成長が続いている。特に 2002 年以降は、大型ホテルの建設や、旅行代理店、レストランの増加によって街は活性化しており、直接的に観光業に携わっていない人々の生活にも徐々に変化が見られている。例えば、テレビは急速に普及し、その多くに衛星放送が導入されていることから、欧州のサッカーリーグやオリンピック大会などの国際レベルのスポーツを日常的に観戦することが可能となった。

テレビ放送の影響を受け、また、余暇の選択肢が拡大する中で、シェムリアップ州のスポーツ環境は、近年、大きな変化を見せた。1994 年以降の新しい国家体制の下で中等教育を受けた世代が 20 歳前後となっており、仕事をしながらスポーツをする者、テレビでスポーツ観戦を行う者、観客として試合を見に行く者の数が格段に増加した。特に、サレットが推進しているサッカーについては、2000 年に入ってから、若者が自分たちでチームを結成し、練習を行い、他チームと対戦することが一種のムーヴメントとして国内に浸透した。現在、20 歳前後の世代は、小学校、中学校の時代に遊びとしてサッカーをしていたが、身体の成長や経済的な自立と時を同じくして、スポーツとしてのサッカーが出来る環境が整っていった。そのため、「ほとんど全てのカンボジア人の男子青年」がサッカーを始めたと言われるほどである。正確なチーム数や選手数は把握されていないが、サッカーグランドと思われる広場や空き地が街中や郊外に点在しており、朝夕の

涼しい時間帯に多くの若者がサッカーを行う様子は、都市、農村を問わずカンボジア国内に共通して見られる光景となった。

図1　オク・サレット氏

筆者がサレットと初めて出会い、カンボジアの教育、学校スポーツと関わり始めたのは 1998 年である。この頃、サレットはシェムリアップ州教育局スポーツ課長としての勤務を開始し、学校を中心としたスポーツ振興に携わり始めた時期であった。しかし、この時期のカンボジアの学校スポーツは、発展に不可欠な政策的裏付け、人材、施設インフラ、用具用品、人々のニーズ、などの振興に必要と思われるおおよそ全ての条件に欠いた状況であった。近年になってスポーツ愛好者が増え、自らがスポーツをしないまでも「子どもにスポーツをさせたい」と考える保護者が増加したが、1990 年代までのカンボジアでは、首都のプノンペンを除いては、スポーツは人々の生活に密着したものではなく、スポーツの役割や必要性などを教育局内部や各学校に説明する必要があった。

本研究では、1998 年以降のカンボジア、特にシェムリアップ州におけるスポーツの発展を記録するために、オク・サレットのライフヒストリーを読み解く。サレットは、ポルポト時代以前からサッカーナショナルチーム代表として活躍し、引退後にはスポーツ行政官として、長年、国内のスポーツ復興活動に携わった。本研究は、ポルポト時代を生き抜き、スポーツ振興に尽力した氏の人生を紐解くことにより、紛争前後の社会におけるスポーツの衰退と発展の歴史を時系列に沿って整理することを目的とする。後に詳述するポルポト時代の損失を理由として、現在のカンボジアにはスポーツに関する過去の記録がほとんど残っていないため、一部のスポーツ関係者の記憶に頼りながら復興をせざるを得ない。サレットのようなポルポト時代の前後に、深く国内のスポーツ振興に携わった人物の半生を記録することは、後のカンボジアスポーツの発展のための貴重な資料となるだけでなく、他の紛争を経験した国や地域への示唆を含む可能性を有している。

研究は、ライフヒストリーインタビューの結果を中心にまとめる。ライフヒストリーインタビューは、2007年9月にカンボジアシェムリアップ州にて行った。被調査者の話の流れを遮らないために、簡単な質問項目のみを示す対話形式を採り、ICレコーダーによる録音の後、逐語おこしによりトランスクリプトを作成した。トランスクリプトの作成においては、1)クメール語の逐語訳を日本語に翻訳したもの、2)音声データから直接起こした日本語訳、の二つを作成した。1)については、サレットや筆者と親交の深いカンボジア人翻訳者、2)については、後述する通訳者に作成を依頼し、2者を対照させることにより内容の正確さを担保した。

被調査者であるオク・サレットと筆者は10年来の付き合いであるため、ラポールの形成に問題はなかったが、筆者のクメール語(カンボジアの言語)能力に問題があったため、サレットとの関係が深い日本人研究者に通訳を依頼した。サレット、通訳者、筆者の3名は、過去に一緒に仕事をした経験があり、通訳者と筆者、通訳者とサレットの各々の組み合わせでの調査経験も有している。そのため、通訳者に対して事前に質問項目の確認を行った上で、インタビューの流れは通訳者に任せることとした。インタビュー中に通訳者と筆者がショートハンドにより、発話を妨げない程度に逐次、質問項目や回答内容の確認を行なった[2)]。

次章では、サレットのこれまでの人生を、1)高校卒業まで、2)ポルポト時代終了まで、3)NGO勤務時代まで、4)教育省スポーツ行政官として、の4時代に分割し、カンボジアの歴史と時代ごとのスポーツの状況をサレットの人生から照射して記述する。第3章では、現在のカンボジアのスポーツの状況を、1)カンボジア全土、2)シェムリアップ州、に分割して詳述する。第4章では、サレットの語りの分析からカンボジアスポーツの今後の発展の道筋を探る。

2. スポーツと共に生きて

2-1 高校卒業まで[1947年(0歳)－1963年(16歳)]

カンボジアは、1953年にフランスからの完全な独立を果たし、その後、ノロドム・シハヌーク国王による統治がなされていた。政治的には、隣国ベトナムで長期化した戦争の影響を受けていたが、国内は「インドシナのオアシス」「東洋のパリ」と呼ばれる豊かな社会であった。オク・サレットは、1947年5月30日にカンボジア王国プレイヴェン州で父オク・サーリと母スヴァン・リンの第2子、長男として生まれた。兄妹は、女10人、男3人の13人であるが、後に詳述するポルポト時代にそのうちの4人を亡くし、サレットが大学生の時に2人を病で亡くしている。国家公務員として計画局一等書記官などの要職を歴任した父は、フランス語、パーリ語などの複数言語が出来る知識人であったため、ポルポト時代に虐殺の犠牲となった。父は、長男であるサレットに勉強を強制することはなく、やりたいことは何でもやらせてくれ、行きたいと言えばどこにでも

行かせてくれた。サレットには、父とサッカーをした記憶は全くないが、父はサッカー観戦が大好きであった。サレットは100km以上離れた首都プノンペンで行われた国際試合に、父と観戦に赴いたことを当時のスタジアムの様子と共に鮮明に記憶している。

サレットの母は、2010年現在、80歳を超えて健在である。母も父と同様に勉強やスポーツを強制することはなく、のびのびとサレット少年を育てた。サレットは、小学校時代から運動が得意であったが、両親は息子の類まれな運動能力には気付いておらず、高校時代に出場した全国大会の金メダルを家に持ち帰った時からサレットを応援し、また、両親もスポーツが好きになっていった。シェムリアップ市小学校からジャナバルマン2世高校(中等教育課程)に進学したサレットは、高校3年時に高等学校全国大会の100m、200m、4×100mリレーの3種目に州代表として出場し、200mで全国優勝を果たした。

サレットは、中学時代に出会った体育教員タン・キリーボットの影響で、本格的にサッカーを始めた。始めた当時はストライカーであったが、高校時代にキーパーに転向している。タン・キリーボットは、現在もシェムリアップに居住しており、長い年月ののちに、サレットがタン・キリーボットの2人の息子にサッカーを教え、さらにその息子、タン・キリーボットの孫にも指導をしており、サレットは家族ぐるみの交流を現在も大切にしている。

2-2. ポルポト時代終了まで[1964年(17歳)－1979年(32歳)]

1964年に首都プノンペンの2年制の大学に進学したサレットは1966年に卒業し、直後から1968年までの3年間、スポーツマネジメントを学ぶために北朝鮮に留学した。北朝鮮では、授業と1日3回の練習をこなし、練習の合間に大量の食事と甘味を摂った結果、留学後の4カ月の間に7kgの体重増に成功した。

帰国後、21歳の時にカンボジアユース代表と本代表に同時招集され、カンボジア代表選手としての生活が始まった。共和制ロンノル政権下にあったこの時代には、カンボジア代表チームの監督は、北朝鮮人、フランス人、チェコ人、中国人らが歴任しており、チームは多くの国際大会に出場していた。代表チームは、ベトナム、タイ、インドネシアなどに遠征し、1971年にジャカルタで開催されたアジアチャンピオンシップでは、優勝のビルマ、準優勝の北朝鮮に続いて3位となった。この年、サレットは、バレーボールのカンボジア代表選手であった女性と結婚し、その後、2児をもうけた。

1960年代のカンボジアは、アジア有数のスポーツ先進国であった。他の社会主義国と同様に国立のトレーニングセンターで選手強化を行い、近隣国からスポーツ留学生を受け入れていた[3)]。第二の都市、バッタンバンでは、8～13歳のジュニアナショナルチームが作られ、集中的なトレーニングが行なわれていた[4)]。1965年には、首都プノンペンに図2のオリンピックスタジアムが建設された。このスタジアムは、共産圏でのオリンピック開催を目論む中国の支援により建設され、オリンピック開催は実現しなかったものの図3のような国内大会を始め、国際大会も行われた。

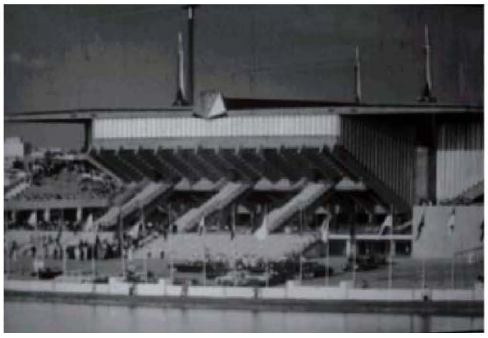

図 2　1960 年代のオリンピックスタジアム
出典: “Cambodia 1965” DVD Video (2008)

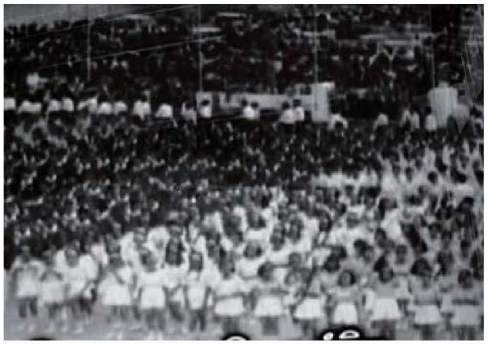

図 3　1960 年代の国内大会の様子
出典: “Cambodia 1965” DVD Video (2008)

しかし、1969 年以降、米軍・南ベトナム軍からの空爆を断続的に受けて、国内の治安や経済状況が徐々に悪化していった。1970 年に米国の支援を受けたロンノルがシハヌーク大統領を追放したことから国内は本格的な混乱に陥る。内政の悪化を止められないロンノル政権に対する住民の不満が高まり、各地で「民族解放戦線(通称クメール・ルージュ)」の勢いが増していった。シハヌーク大統領と組んだクメール・ルージュは、対米軍・南ベトナム軍を打ち出し、北ベトナム、中国、ロシアなどの支援を受けて首都プノンペンの奪還に向けて進軍した。この中で、1973 年に大学を卒業したサレットは、代表チームでの活動に専念するために国家陸軍チーム(Force Army National Khmer: FANK)に所属し、サッカー漬けの日々を送ることとなった。

1975 年 4 月 17 日、北ベトナムが南ベトナムのサイゴンを陥落する約 2 週間前に、カンボジアではクメール・ルージュがプノンペンを制圧し、この日から暗黒の歴史である「ポルポト時代」が始まった。クメール・ルージュは、知識や意思を持たず国のために働く農民のみで作る国を理想とし、その実現のために全国民を農村に強制移住させた。全国各地に集団管理生活、強制労働のための共同生活所(サハコー)が設置され、若い農民に指揮をさせた。4 月 17 日にプノンペンにいたサレットは、ポルポト軍の兵士に追い立てられてコンポンスプー州に動き、その後、数回、移動を命じられた。この間、サレットは、読み書きが出来ず知識が無いふりをし、サッカー選手であったことと本名を隠し続けた。この対応は、代表選手の多くが犠牲となった拷問や虐殺を避けるために、北朝鮮での経験を元に自分で考えて行ったものであった。サハコーでは、十分な食事が与えられず常に空腹の状態であり、加えて遠方への徒歩移動と過酷な農作業が課されたため、病気や衰弱を原因として死亡する者が続出した。また、「反体制」とみなされた知識人や反逆者は、拷問の末に虐殺されており、1979 年まで続いたポルポト時代の犠牲者数は、資料や調査結果によって異なるが、170 万人とも 300 万人とも言われている。サレットは、この時期に、父、4 人の兄妹、妻、2 人の子ども、また、代表チームで共に戦った多くのチームメイトを失っている。

1978年末にベトナム軍、フンセン・ヘンサムリン連合軍がプノンペンに入城し、1979年1月にクメール・ルージュを制圧してプノンペン政権を樹立した。これを持って、3年8カ月20日間続いたポルポト政権は幕を閉じた。1979年5月、サレットはバンテアイミエンチェイ州プノムスロック郡から故郷であるシェムリアップ州に向かって100km以上の距離を歩いた。5月は乾期であり1年で最も暑い時期であるため、昼間は木陰で休み、夜になると歩いて移動する生活を繰り返した。体力が落ちており、手持ちの食糧もなかったため、道中でトカゲなどの食料を探し、時には「ほんの少しの」食べ物を分けてもらった。生まれた場所に戻りたい一心で、4、5km歩くごとに休みながら移動した結果、シェムリアップの最初の場所であるクララン橋に6月中旬にたどり着いた。シェムリアップでは、民家は破壊されており、建物や橋は全て木に囲まれていた。約1ヵ月間、両親と兄弟を探して歩き、近隣のバタンバン、スヴァイリエン州にも消息を尋ねたが見つけることはできなかった。

2-3. NGO勤務時代まで[1980年(33歳)ー1996年(49歳)]

1979年6月にシェムリアップに帰還したサレットは、街の中心部で流しのギター演奏を始めた。ギターは、学生時代に練習していたため、ベトナムの団体に混ざって路上で演奏し、チップとして米をもらっていた。また、倒木と成長した新たな木によって荒廃した村を元に戻すために、「木を切る」ことも生活の一部であった。この生活は1980年1月まで続き、その間に現在の妻と二度目の結婚をし、後に3人の子どもをもうけた。

この時期、ベトナムが支援したフンセン・ヘンサムリン連合が新たなプノンペン政権を樹立したのに対し、かつて政権の座にあった反越三派連合は「民主カンプチア連合」を結成し、両者の間で内戦が開始された。カンボジアの混乱期というとポルポト時代が注視される傾向にあるが、内戦が継続した1980年代前半もカンボジアの苦難の歴史の一部である。この時期、多くのカンボジア人が、日々の食糧や住む家に困り、地雷やポルポト軍の残兵による攻撃を恐れながらも、タイ国境の難民キャンプを目指した。ポルポト時代が終わったとはいえ、生活インフラや社会機能を喪失した国内で、各個人が生活の再建を図ることは容易ではなかったのである。さらに両派による「国民の引き込み」も頻繁に行われており、ポルポト時代に続いて自由な表現や移動が禁止されていた。このような状況下で、タイ国境に逃れる難民は年々増加し、多数の難民流出はそれまで闇に包まれていたカンボジア社会での出来事を白昼にさらすこととなった。国際社会では、同時期にベトナム、ラオスから逃れた難民と併せてインドシナ難民問題として認識された。

サレットは、1980年に文化・情報・スポーツ省シェムリアップ局スポーツ課長として働き始め、同時にベトナム人の選手たちとチームを結成し、サッカーの練習を始めていた。1982年には、カンボジア代表チームに復帰し、首都プノンペンで行われたインドシナカップに出場したほか、83年、84年にはロシアへの遠征に出かけた。1985年、38歳の時に代表チームを退き、1987年には省庁再編により教育・青少年・スポーツ省(Ministry of Education, Youth and Sport: MoEYS)が設けられたため、シェムリアップ教育局スポーツ課長に就任した。

1990 年代に入ると、国内の政治的混乱の収束が計られ始めた。1991 年にパリ和平協定が締結され、1993 年に国連カンボジア暫定機構(United Nations Transitional Authority in Cambodia: UNTAC)の下で初の総選挙が行なわれた。パリ和平協定は、国連が主体的に国家再建に乗り出した最初の例として注目を集め、紛争を武力ではなく政治決着で図ることを目的に掲げていたが、国王であるシハヌークをプノンペン政権側に入れるための一大演出であったとも言われている。カンボジアは、王国としての体を保ち続ける必要があり、敗走しゲリラ活動を続ける一派と国王の距離を置くにために、既に住民生活のレベルでは平和が戻りつつあった時期に和平協定が締結されたのである。1993 年に行われた第 1 回総選挙は、90%以上の高い投票率を持って終了し、長い共産党政権の歴史に終止符を打ち民主国家としての歩みを開始した。サレットは、1994 年から 1997 年までシェムリアップを離れ、国連高等難民弁務官事務所(United Nations High Commissioner for Refugees: UNHCR)に関連する NGO のスタッフとして勤務した。この間、シェムリアップ教育局は、スポーツ課長を空席として青少年課と一体としていたことから、市街地中心部にあるスタジアムは管理されず、放置されて草むらとなり、子どもたちの遊び場となっていた。

2-4. 教育省スポーツ行政官として[1997 年(50 歳)－2009 年(62 歳)]

サレットは、1997 年にシェムリアップに戻り、スポーツ課長に再就任した。街の中心部に廃墟のように残っていたスタジアム内にスポーツ課オフィスを開き、競技場の整備を開始した。手始めに 2000 年の中学校全国大会の招致を目指すこととし、州内の小・中・高等学校におけるスポーツ環境の整備、備品の配置、新しい教員の確保などに向けた活動を開始した。しかし、当時のシェムリアップには、スポーツを行うための施設、用具、人材、資金が全くなく、正にゼロからのスタートであった。スポーツ課の職員は、陸上を専門とするケウ・ブントーン(現在のスポーツ課長)、バレーボールを専門とするトゥ・ソム・アンにサレットを合わせた 3 名であったが、教育局内には、局長を始めスポーツに関心を示す者はおらず、3 名で全ての困難を乗り切らなければならなかった。この状態は、後に 5 代目の教育局長タ・コム・シンが就任するまで続くこととなる。

サレットは、州内のスポーツ振興に関する計画書を準備し、当時の州知事、農業局、商業局、さらには「お金を持っていそうな個人」に資金の提供を依頼してまわった。その中で、州知事が計画に理解を示して資金を提供したため、釘などの資材を購入し、「スポーツ活動に使えそうな廃品」の補修を行った。さらに養豚をし、市場で肉を売り、その利益を州内のスポーツ環境の整備に活用した。当時は、公務員の給与はほとんど支給されなかったため、養豚で得られた肉の一部を家族の食糧として確保していた。これらの活動によって 2000 年の全国大会招致に向けた準備を進めた結果、2001 年大会の開催が決まった。全国大会の開催州には、教育・青少年・スポーツ省からフィールドの整備、修理、オフィスの建設などのための予算が割り当てられるため、これにより州内のスポーツ環境の整備が本格化した。

サッカーの元ナショナルチームメンバーであったサレットは、代表を退いた後もコーチや連盟役員として首都プノンペンで仕事をすることを請われたことが数回ある。しかし、当時の代表選手全員が都市部から選出されていたため、農村部から選手が出ない状況を憂い、地方での普及活動を続ける道を選択した。サレットのかつてのチームメイトであり、同じくポルポト時代を生き延びた盟友スライムン・サリムは、カンボジア代表チームの監督を務めた時期がある。彼もサレットと同じ理由から、代表チームを指揮する際には首都プノンペンに、それ以外の時間は地元であるコッコン州でスポーツ課長を務めながらサッカーとスポーツの振興活動を続けた。

サレットは、2007 年に教育局を定年退職し、同時に相談役に就任した。2009 年には相談役の職も辞したが、2010 年現在もサレットでなければ進められない業務と後進の育成を無給で行っている。次節において、カンボジアのスポーツを取り巻く現状を「国」のレベルから概観した後に、サレットが中心となって復興を進めているシェムリアップ州のスポーツの現状を詳述する。

3. カンボジアのスポーツ振興

3-1. カンボジアスポーツの現状

表 1 にこれまでのカンボジアの夏季オリンピック大会出場選手を示している。

表 1　カンボジアの夏季オリンピック参加

出場年	大会・開催国	競技種目	参加選手数(うち女子)
1956	第 16 回メルボルン大会 (オーストラリア)	馬術	1
1964	第 18 回東京大会 (日本)	ヨット	3
		ボクシング	4
		自転車	1
1972	第 20 回ミュンヘン大会 (西ドイツ)	ボクシング	2
		陸上(100m)	2(1)
		陸上(400m)	2
		水泳	4
1996	第 26 回アトランタ大会 (アメリカ)	レスリング	1
		水泳	2(1)
		陸上	2(1)
2000	第 27 回シドニー大会 (オーストラリア)	陸上	2(1)
		水泳	2(1)
2004	第 28 回アテネ大会 (ギリシャ)	陸上	2(1)
		水泳	2(1)
2008	第 29 回北京大会 (中国)	陸上(ﾏﾗｿﾝ)	1
		陸上(100m)	1(1)
		水泳(50mF)	2(1)

出典:NyoNyum36, 2008 年 8-9 月号, P.47 を参考に筆者作成

1956年に馬術で初参加を果たしたが、1972年ミュンヘン大会以降の24年もの長きに渡りオリンピック大会への出場は途絶えていた。1996年のアトランタ大会に再参加して以降、2000年からはパラリンピックにも選手を派遣している。カンボジアオリンピック委員会(National Olympic Committee of Cambodia: NOCC)は、1983年に設立され、1994年に国際オリンピック委員会に承認された。

図4に示すように王国憲法第6章「教育、文化、社会」では、スポーツへの言及がなされている。憲法に基づいたカンボジアのスポーツ政策は、MoEYS の管轄下にあり、1999年には、図5のようにスポーツ分野に関する政策が明記された。この中で学校外も含めたスポーツの分野の重点化を示しているが、「復活」という単語を使用していることから、過去になされた当該分野の実績に対する自負が伺える。

MoEYSは、2006年～2011年までの活動[5]として、1)国際、国内、地域レベルの競技大会への資金面での協力体制を含んだ詳細なスポーツ政策、戦略、プログラム策定への準備および、スポーツに関する企画、運営、実行に関する機関合意のレビューを行なう、2)体育教員、スポーツ指導員、審判に対するトレーニングプログラムをこれまで以上に提供する、3)スポーツフィールドや施設の新設と改修に関して、特にこれらが行き届いていない農村部に焦点を当てて優先順位を明確にする(MoEYS:2005)の3点を掲げている。

第6章【教育、文化、社会】
第65条
国家は、国民があらゆるレベルの教育を受ける権利を守り、向上させ、また教育が少しずつ国民に浸透するようにあらゆる手段を講じる。国家は国民の健康に資するためにスポーツ教育の分野にも力を入れる。

図4　カンボジア王国憲法

出典:王国憲法原文を筆者訳

- カンボジア全土に 9 年間の基礎教育を行き届かせ、実用的な読み書き能力向上の機会を増大させる。
- 効果的な改革を通じ、教育組織の質の近代化と改善に努める。
- 教育と技術訓練の発展を社会経済の要請及び労働市場にリンクさせる。
- 青少年とスポーツの分野を公教育や私教育の場に復活・発展させる。

図5　教育振興のための政策

出典:MoEYS“Education Indicators”(1998) を筆者訳

小学校、中・高等学校の多くが課外活動としてスポーツの機会を児童・生徒に提供している。最も盛んで人気があるのが、サッカー、バレーボール、陸上競技であり、これらの種目では表2に示すように全国大会が実施されている[6]。その他にキックボクシング、

バドミントン、バスケットボール、テコンドーなどを行う学校も見られるが、部活動の実施は、1)施設、2)用具･用品、3)指導者、の 3 点の有無により個別に決定されており、必然的に学校長の意欲や地域のニーズ、寄付の集まり方等に大きく左右される。

小学校、中・高等学校の全国大会の計画は、州教育局が作成して本省に申請する。計画が採用されると開催予定の州には、競技場や備品整備のための予算が配分される仕組みとなっている。全国大会は、毎年 2〜3 週間に渡り、全ての競技の選手が 1 州に集まり、寝食を共にして実施される。大会は、1)小学校、2)中学校、3)クラブ(社会人)に分類されており、各々が州代表チームを結成して大会に参加する。この選手選抜、トレーニング、派遣を行い、数年に一度、全国大会を開催することが、州教育局の最大の役割であり、学校スポーツ、学校外スポーツ共にこの全国大会を視野に入れた振興がなされている。

表 2　2003 年度 全国大会種目、出場選手数

	競技種目	出場者数(男)	出場者数(女)
小学生	バレーボール	960 名	236 名
	バスケットボール		
	陸上競技		
	サッカー(男)		
中・高校生	バレーボール	1338 名	439 名
	バスケットボール		
	陸上競技		
	サッカー(男)		
クラブチーム (選手権大会)	バレーボール、バスケットボール、陸上競技、水泳、射撃、バドミントン、卓球、テニス、テコンドー、自転車、レスリング、体操、セパタクロー、ペタンク		

出典:プラックソンファス『カンボジア王国カントリーレポート』,第 1 回アジア女性スポーツ会議報告書(2001)

3-2. シェムリアップ州の取り組み

ポルポト政権とその後の内戦の影響は、特に貧困という負の遺産をカンボジア社会に残した。本研究の対象であるシェムリアップ州は、図 6 に示すように現在も最も貧困が深刻な地域の一つである。

シェムリアップ州は、2008 年現在、全 12 郡の中に 428 校の小学校、18 校の中学校、9 校の中･高等学校を有している。学校数に比して体育･スポーツ指導者の数は少なく、体育教員は 1 人の女性を含めて 33 人のみであり、加えて 63 人のボランティア教員で全ての学校の体育･スポーツ教育をカバーしている(Sport Magazine Cambodia:2007)。表 3 に体育･スポーツ人材と施設整備の状況をまとめた。24 州の平均と比較して、体育教員やボランティアコーチの数は少ないが、各競技の指導者の数は多く、特にサッカーは突出している。競技場についても他の競技と比較してサッカーグランドの整備が進んでおり、シェムリアップ州内におけるサッカー環境の充実の様子が伺える。このようにインフラや人材の面で国の目標に従った活動が続けられる一方、州独自の取り組みも見られる。

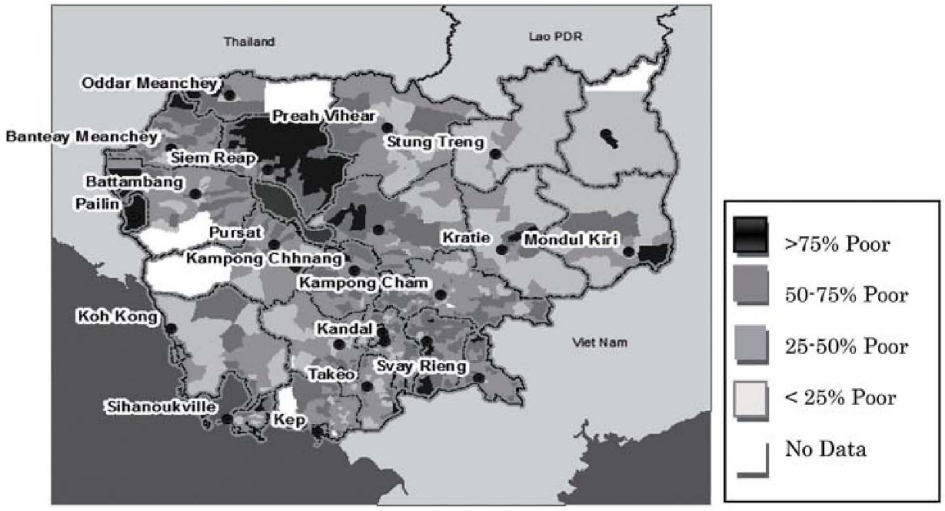

図 6　カンボジア国内の貧困レベル

出典:SCW “The Atlas of Cambodia”, 2007 年

表 3　全国平均から見るシェムリアップのスポーツ関連人材と施設

		体育教員	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｺｰﾁ	ｻｯｶｰ指導者	ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ指導者	ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ指導者	陸上指導者
スポーツ関連人材(人)	シェムリアップ州	11	43	52	41	10	28
	24 州平均	59.6	70.5	15.8	26.1	5.3	15.6
	総数(全国)	1430	1692	378	627	126	374
				ｻｯｶｰ	ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ	ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ	陸上
スポーツ関連フィールド(ヵ所)	シェムリアップ州			46	34	5	700
	24 州平均			39.6	191.3	11	696.9
	総数(全国)			951	4591	263	16726

出典:MoEYS “Sport Development Report 2005-2006”より筆者作成

図 7 にシェムリアップ州におけるスポーツ振興への取り組みを示したが、5〜12 については、他州では見られない独自の取り組みである。州独自の取り組みは、一定の予算規模までは、州教育局の裁量で行われ、本省への報告義務を有する。多くの国際機関からの開発援助が入るカンボジアでは、地方自治体が独自に連携先を探すことが可能であり、シェムリアップは、多くの外国人観光客が訪れることから、他州と比較して援助の機会を得やすいと言える。

1. 各種大会への州代表の派遣
2. 州代表チームの結成、トレーニング
3. 学校スポーツ環境の整備
4. 学校スポーツへの運営支援、技術指導(郡教育局)
5. スポーツ・レクリエーション大会の開催
6. 女子サッカーチームの創設
7. スタジアム(競技場)の郊外への移転
8. ボクシングクラブへのライセンスの発行
9. コーチングクリニックの実施
10. 国際ハーフマラソン、障害者大会など国際大会の受け入れ
11. クラブ協会の設立支援
12. NGO、国際機関等との連携

図 7　2008 年現在のシェムリアップ州教育局スポーツ課による取り組み

州教育局は、現在、スタジアムの郊外への移転を進めている。州の中心部に位置していた旧スタジアム(図 8、9)の老朽化が問題となっていたが、近年、当該地区の地価が高騰したため、土地の売却と引き換えに郊外に設備の整った新スタジアム(図 10、11)の新設が計画されたものである。移転は、2006 年から開始され、10ha 近い面積を有する新競技場の建設が進んでいる。新競技場は、観戦スタンドを有したメインフィールドの他に、サブフィールド、屋外プール、室内競技場(体育館)、テニスコート、トレーニング施設などの付設が予定されているが、予算が不足すると工事が中断することから計画は遅々として進まず、完成部のみを使用する部分オープンの状態が続いている。州教育局は、部分オープンした競技場を使用する大会や協会から使用料[7)]を徴収し、建設費用に当てている。

図 8　旧スタジアムゲート

図 9　旧スタジアムグランド

図 10　新スタジアム体育館

図 11　新スタジアムグランド

4. 発展への道筋　～サレットの言葉から

サレットは、混沌の時代を生き延び、国の代表選手であったが故に命の危険にさらされながらも、なおもスポーツ振興に携わり続けている。シェムリアップは、近年、国内でスポーツ振興に成功している州として認識されており、政府が発行する国内唯一のスポーツ誌において、「シェムリアップでは、スポーツの分野において注目すべき活動を目にすることができるだろう。その中には、選手たちのトレーニング、学校内外でのスポーツ、インフラ整備などが含まれる」(MoEYS:2008)と評されている。

シェムリアップのスポーツの発展を牽引してきたスポーツ課の中心にいたのはサレットであるが、この発展には、サレットの経験に基づいたスポーツに対する価値観が見え隠れする。例えば、サレットは、発展途上の社会におけるスポーツに関する議論の際に「過度のレベルダウン」に警鐘を鳴らしていた。国内外の支援者やカンボジア人の関係者が、「途上国であればこのレベルいいだろう」、「現在のカンボジアでは仕方がない」と考えがちな、例えば、ルールより狭いコート、低いネットやゴールなどの不十分な施設や用具を用いて練習や試合を行うこと、あるいは、競技者がルールを守らず、また、審判がそれを黙認するなど、これらのレベルダウンを出来る限り避けようとしたのである。各学校においても、児童・生徒に制服のままスポーツをさせるのではなく、T シャツとズボンという動きやすい服装での運動実施を奨励した。もちろん、これらをスポーツ参加の条件として求めることは、貧困が深刻な地域において、さらには家庭ごと、学校ごとに生活状況が異なる現在のカンボジアでは困難である。しかし、スポーツの専門家としてのサレットが、カンボジアの社会に適合する一定レベルの基準、言い換えれば現代のカンボジアにおけるスポーツの理想像を自分の中に定めており、多くの人々がこの基準を参考に「スポーツとは何か」を理解していたと言える。このことは、グローバル化した近代スポーツそのものの正否はともあれ、今後のカンボジアのスポーツが国内のみでなく国外に向けての発展を目指すのであれば非常に重要なことである。カンボジア

にとってのサレットの存在が、世界のスポーツ環境にアクセスする際の窓口になるからである。サレットのような独自のスポーツ観を持つ人材は、現在のカンボジア国内では非常に限られている。

サレットは、スポーツインフラの整備について、政府・地方自治体の役割の重要性を訴え続けており、2008 年に「私は州内でスポーツ活動を活発化させ、活気を持たせることを望んでいます。州教育局は、たとえ何か困難な問題があったとしても、全生徒また全市民が何らかのスポーツに参加することができるようにするために時間を費やすつもりです」(MoEYS:2008)と述べている。同時にサレットは、人々の自発的なスポーツへの取り組みの重要性について次のように語っている。

> 私は最も重要なことは、彼らを(スポーツ活動に)参加させることだと思います。もし人々がプレイするフィールドがなかったらあなたはどうしますか。まずフィールドを整備しなければなりません。そのためには土地(の計測)について知識をつけなければなりません。彼らにも理解してもらいたいのです。彼らが理解するようになれば、大会のために良いユニフォームも、良い靴も買えるのです。
>
> スポーツ活動において、特に引退した選手に試合の運営に参加してもらったり、若い選手を指導してもらうこと、また、(シェムリアップの中心産業である)観光業を中心とした様々な会社や NGO がリーグを結成し、試合を行うことにより、共にレベルアップすることを目指している。これらが実現すれば、シェムリアップのスポーツは真に繁栄するだろう。

また、人々の取り組みと政府の役割の関係について次のように述べている。

> 私たち(教育局スポーツ課)はアイディアは持っていますが、人々が参加してくれなければできないのです。人々とは選手です。チームです。チームに関わっている村の人々です。私たちが大会を開催すると、健康のためとか、好きだからという理由で人々は簡単に参加してくれます。参加してくれない人は、好きではない人です。好きではない人はどうすることもできませんが、サッカーが好きでないなら別の競技をしてくれればいいのです。
>
> 政府は活動を行っても助けてくれない訳ではありません。彼らは助けてくれるのです。ただ、本省は全州・特別市の中で、活動を多く行っている州に対して優先的に予算を付けているのです。ただ一つの活動をやるにしても私たちは考えなければなりません。

様々な経験をしてきたサレットが、スポーツ振興の際に人々の自発性や参加を重視していることは、開発途上国のコミュニティレベルでのスポーツの発展に示唆的であり、あるいは、サレットがこのような思いを持っているからこそ、現在のシェムリアップ州におけるスポーツ、特にサッカーの目覚ましい発展があったのかもしれない。サレットは、行政官として州内のスポーツ振興に関わる職務を行う一方、自らもコーチとして長年、州内の子どもや青少年への指導を続けてきた。指導するチームは、小学生からクラブチームまで様々であり、あらゆる年代に直接指導を受けた教え子が存在する。教え子たちが、様々な機会にスポーツに関する質問や相談をサレットに投げかけており、親しみを込めて「スポーツの先生」、「サッカーの先生」と呼んでいる。マネジメント、競技力向上、個々の種目の技術指導にいたる様々な問題への包括的なアドバイスが可能なため、子どもから高齢者にまで広く慕われているのである。サレットが、草の根のレベルにおいてもシェムリアップのスポーツ振興のキーパーソンであることは紛れもない事実である。加えて、ピラミッドの頂点に位置するタイプのキーパーソンではなく、あらゆる年代、あらゆる層とのコミュニケーションを保てる存在であり、人々の自発的な活動を促し、地域のスポーツを発展させてきた功績は大きい。

近年の開発分野では、各個人の幸福追求、すなわち人間開発を開発目標の中心におくことが主流である。センは、ケイパビリティ・アプローチの中で、開発を「人の選択の範囲を拡大する過程であり、人が自らの価値を認める生き方をすることができる自由を確保する行為」(Sen:1993)とし、ハクは、「開発とは、個々の人間の長く健康で、創造的な生活を実現し、人間が選択権を拡大する過程である」(Haq:1990)としている。人々が自らの幸福を考え、自発的に行動を起こすことこそが開発であり、近年のこの潮流を考えるならば、サレットの実践は、「スポーツを通じた地域開発」である。

サレットの言葉は、ポルポト時代にスポーツに関わる文化、人材、施設、用品、組織、システム、資料などの全てを失った中で、スポーツを一から復興させるという類まれな経験に裏打ちされた貴重なものである。カンボジアは、全ての社会的活動を禁じられ、多くの知識人が虐殺された3年8カ月の後に正にゼロからの再スタートを余儀なくされた。物質的なものだけではない文化、風土、伝統としてのスポーツの復興は、カンボジアの他の分野の復興と同様に困難を伴い、長い時間を有している。この状況下で、ポルポト時代を生き残った少数の関係者の記憶と努力のみを頼りに行われているスポーツ復興活動は、必要最低限でありながら活き活きとしており、スポーツの持つ魅力を直接的な形で私たちに伝えるのではないだろうか。

［注］

1）外務省 HP http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/cambodia/data.html [2010/9/28]参照。

2）調査者は 2 名とも被調査者と研究・プロジェクトを共に行っており、調査者が複数になるデメリット(緊張の増幅など)は問題にならないと考えた。

３）Chahay Kimsan 現陸上ナショナルチームコーチの証言から。1950～1960 年のシハヌーク時代を振り返り、「ポルポト時代で全て崩壊し、その後もカンボジアのスポーツ界はスポンサーがなく、国際舞台で日の目を見ることがなかった。しかし、この数年はようやく活気づいてきた」と答えている(NyoNyum,36, 2008 年 8-9 月号)

４）青年海外協力隊員(水泳)が 7 年間派遣されていた。柴田学「カンボジアのスポーツ状況」HP より。
http://www.valley.ne.jp/~join/network/kampuchea_sports/kampuchea_spo%20.htm [2008/10/10]

５）MoEYS が推進する “Education Sector Support Program: ESSP”の一部にスポーツの項目が設けられている。

６）環境が整っているところでは、地区(郡)大会および州大会が行われ、上位校に全国大会への出場権が与えられている。

７）例えば、2008 年のメインフィールドの貸切使用料は、1 日 35 ドルである。この中には、スポーツ課職員とボランティアなどによる審判の費用も含まれる。

参考文献

MoEYS(2007) “Cambodia Sport Magazine” Vol.30,MoEYS
MoEYS(2007) “Cambodia Sport Magazine” Vol.31,MoEYS
MoEYS(2007) “Cambodia Sport Magazine” Vol.32,MoEYS
MoEYS(2007) “Cambodia Sport Magazine” Vol.34,MoEYS
MoEYS(2008) “Cambodia Sport Magazine” Vol.37,MoEYS
MoEYS(1998) “Education Indicators”, MoEYS
MoEYS(2006) “Sport Development Report 2004-2005”,MoEYS
MoEYS(2007) “Sport Development Report 2005-2006”,MoEYS
Martha C. Nussbaum and Amrtya Sen (1993) “The Quality of Life”, The United Nations University
United Nations(1990) “Human Development Report”, United Nations Development Program
Yukie Yamazaki(2008) “NyoNyum”,Vol.36,8-9 月号, NyoNyum
国連開発計画(2008)『人間開発報告書 2007/2008』、阪急コミュニケーションズ
桜井厚(2005)『ライフヒストリー・インタビュー－質的研究入門』せりか書房
プラックソンファス(2001)『カンボジア王国カントリーレポート』第 1 回アジア女性スポーツ会議報告書

謝辞

本研究の実施にあたり、当時、名古屋大学大学院国際開発研究科に在籍中であった上林俊介氏に研究資料の収集、通訳、成果の分析の様々な面において支援をいただきまし

た。また、神戸大学大学院人間発達環境学研究科の山口泰雄教授、金沢大学人間社会研究域の齊藤一彦准教授には、一連のカンボジアスポーツに関する研究へ様々なご教示をいただいております。この場を借りて心からお礼を申し上げます。

本研究は、科学研究費補助金、大阪大学男女共同参画推進オフィスの研究支援員制度の支援の元で行いました。合わせてお礼を申し上げます。

Efforts for Development of Sport in Cambodia

—Looking back at a Life History of a Football Player who survived the Khmer Rouge Regime—

Chiaki OKADA

The Kingdom of Cambodia is a Buddhist country in Southeast Asia bordered by Vietnam, Laos and Thailand. Under the Khmer Rouge Regime in the 1970's, Cambodia experienced extensive slaughter, which decreased its population from 1 billion to 700 million, although records vary on the exact number of victims. Cambodia still faces many issues such as acute poverty, high child mortality, and lack of social infrastructure.

The purpose of this study is to record the development of sport in Cambodia after 1998, especially focusing on the case of Siem Reap province, which is one of the 24 province/cities of Cambodia, and to organize chronologically the history of sport in pre- and post-conflict societies by reviewing the career of a survivor, Ouk Sareth. In the aftermath of the Khmer Rouge Regime, very few documents, records, and survivors' memories remain. Therefore, the development of sport depended entirely on a few people who had been concerned with sport prior to the Khmer Rouge regime. Ouk Sareth is one of these people; he has been involved in and has devoted himself to promoting sport in the country. Documenting his history will contribute to sport development in Cambodia; in addition, it will set an example for other post-conflict societies. This research is based on the results of a life history interview conducted in September 2007 in Siem Reap, Cambodia.

To emphasize the narrative context of the interviewee, I have used the conversational probing method with simple prepared questions. I recorded the interview with a digital voice recorder and obtained two types of Japanese verbatim transcriptions. One was translated verbatim from Khmer (the Cambodian language) by a Cambodian translator who shared a close relationship with both Ouk Sareth and the author. The other was directly translated from the recorded voice data by a Japanese researcher, who spoke Khmer. Obtaining both these two transcriptions helped me in correctly understanding of the contents of the interview.

This study has three sections. The first section describes the career history of Ouk Sareth by dividing it into four periods: (1) from high school to graduation, (2) until the collapse of the Khmer Rouge regime, (3) until the time he worked as an NGO staff member, and (4) after starting to work as a sports administrative officer in Ministry of Education, Youth and Sport, Cambodia. I clarify the historical background and environment of sport in each period reflecting Ouk Sareth's life. In the second section, I describe the current sports environment in Cambodia from the perspective of sport developments in Siem Reap, which for the most part, owe their success to Ouk Sareth. In the third section, I consider the mean of the future development of sports in Cambodia by referring to these fruitful narratives of Ouk Sareth.